

奈良県立大学地域創造研究センターのミッション ～奈良県南部・東部振興にむけて～



奈良県立大学 理事・副学長 地域創造研究センター長 堀田 新五郎氏

我が国では人口減少・少子高齢化が急速に進行する中、東京圏への一極集中の傾向は継続しており、地域経済は産業の衰退、財政難といった様々な問題に直面しています。さらに足もとでは、これらの構造的な課題に新型コロナウイルス感染症の影響が加わり、問題はより複雑化しています。

一方でコロナ禍は、人々の意識や行動に大きな変容をもたらしており、地域の自主的・主体的な取組みが地域の明るい未来を切り拓くチャンスにもなりえます。

以上のような状況を踏まえ、本誌では、地域に関して幅広い知見を持つ有識者の方々から、奈良県における地方創生・地域活性化に関する研究内容の紹介や提言を頂く寄稿シリーズを連載しており、今回は第10回目（最終回）です。

1 はじめに

明治や大正・昭和初期の学校建築は、実に佳い。郷愁に誘われると同時に、学ぶことへのあこがれが呼びおこされ、居住まいを正して深く息を吸う。「よし、これからはしっかり勉強しよう」、そうした思いにかきたてられるのである。これはなぜだろうか？

以下、3つの写真を見ていただきたい。「写真1」は、筆者が勤務する奈良県立大学のコモンズ棟（令和2年竣工）である。これもなかなか佳い。2020年代の学びにふさわしい機能美が認められる。「写真2」は、奈良女子高等師範学校の本館（明治42年竣工、現奈良女子大学記念館）である。これは素晴らしい。近代建築としての美しさもさることながら、この建物には当時の女性たちの学問へのあこがれが凝集されている。それが見る者の心を動かすのである。向学心の凝集、これは女子高等師範学校だけに限られたことではない。近代日本の学校建築には、つねにそれが見出されるのである。「写真3」に移る。これは天理市旧山田小学校の校舎（昭和10年落成、現山田公民館）である。子どもたちのために、まちの住民たちが木材を出しあって建てたものだという。ここにもまた、「学校に行って学びたい」「学校に行かせて

学ばせたい」という思いが凝集されているのではなかろうか。

思うに、教育の核心は aspiration（吸引・憧憬・願望）にある。学び舎に集う人々が、真・善・美を求めて背筋を伸ばし、深く息を吸うこと、「仰げば尊し」とあこがれること、希望・大志を抱くこと、それが aspiration である。かつて日本の学舎は、その具現化として存在した。いまはどうか？もし、教育の場から aspiration が失われ、現代建築の見栄えのよい施設が、しかし向学心の凝集とは別物であるとすれば、仏造って魂入れず、教育の精髓が問われる事態といえよう。学にたずさわる者の一人として、日々自問する次第である。近代の物語、小説・映画などでは、繰り返し繰り返し、「学校に行きたい・行かせたい」という思いが描かれている。「自分はその夢を果たせなかった、せめて弟には、妹には、その夢をかなえさせたい。学費はなんとしてでも工面する」。その時代、学校には強い吸引力が存在したのである。それはなぜだろうか？また、その吸引力は、いまどうなってしまったのか？

この小稿は、こうした問いに導かれて模索した、学びの新しい形態に関するドキュメントである。それは同時に、奈良県立大学地域創造研究センター（以下「センター」）が、奈良県南部・東部振興に

写真1：奈良県立大学コモンズ棟



写真2：奈良女子大学記念館



写真3：山田公民館（天理市）



どうかかわっていくのか、その方向性を探る試みともなろう。ではまず、センターの創設と、この1年間の活動について報告したい。

2 センター創設

世紀が替わる2001年、奈良県立大学は日本で初めて「地域創造学部」を設立した。その後20年後にセンターを創設し、地域創造への新たな取組を開始したところである。そこには、ここ20年にわたる日本社会ならびに大学についての危機意識が存在する。

(1) 現状認識

こうした危機意識は、たとえば次のような疑問として表現されよう。「失われた10年は、失われた20年となり、30年となった。いったい、いつまで失われる予定?」「東京一極集中の弊害はだれもが認識し、しかも改善されない。何故だ!?」「この20年、日本中で、住民も行政も大学も地域振興や地方創生に汗をかいてきた。でも地域は衰退を続ける。必要なのは、もっと汗だくになることなのか!?」

この10年、日本各地の大学が地域系の学部・学科を作り、「地域貢献」に邁進し続けた。こうした努力のなかで、各地で「画期的な取組」や「成功事例」が次々と生まれている。しかし、こうした活性化事業がいくら積み重ねられても、総体として地域の衰退が止まらないとしたら、それ

は地域振興の活動と衰退の力学との間に、ズレがあるからではなかろうか。地域の衰退は生活習慣病にたとえられる。長年にわたる「生のスタイル」を変えない限り、根本的な治療にはなりえない。個々の症状への対症療法(=個々の活性化事業)では限界がある。大事なのは、衰退の構造力学を解明し、これまでとは異なった力の流れを提示することであろう。それが、知性の役割ではなかろうか。比喩的に言えば、知性とは、社会を支配する力学に埋没せず、その批判的な再考を行う「浮力」なのである。地域を衰退させる力学、その縛りから抜けるために、いま「知性=浮力」が求められている。

(2) センター創設の理念

本学も含めこれまで各地の大学は、地域のニーズに合わせた個別的な活性化事業に力を注いできた。もちろん、目の前の課題解決は必要であり、こうした努力には深い敬意がはらわれるべきである。しかし、社会において「知」を担うべき大学が、衰退の構造力学にメスを入れず、個々の地域課題の発見や、地域資源の発掘・発信のみに没頭するならば、それもまた大学のありようとしては問題であろう。今後も、文明の力学はグローバル化を加速させ、東京一極集中を強化する。この流れを変えない限り、日本中の努力にもかかわらず、地域の衰退は止まらないのではないか。奈良県立大学は、衰退の力学の「外」を示し、新しい「生のスタイル」を模索するために地域創造研究セン

ターを創設した。創造行為は既成概念の外部で生まれる。これまで支配的だった力の場から外れた、いわば「無重力空間」が創造の場なのである。知性は、そのための浮力を提供しなければならない。地域を衰退させる力学、その縛りから抜けよう。「大学にはもっと知性を！ 地域にはもっと創造を！」これが、センター創設の理念である。

もちろん、私たちはこれまで通り、それぞれの地域における目の前の課題解決にも努めていく。センターは、こうした活動をともに担い、活動に従事する人々・諸団体のよき相談相手をめざすのである。情報が集約され、人々が集い、様々な交流が生まれ、新しい試みが創造される、こうした場に成長していくことが、私たちの大志（aspiration）にほかならない。頭をあげて文明の明日を望み、頭をたれて眼前的課題に傾注する。センターの活動が、時代を拓く地域創造であるためには、遠望と近傍の両方が必要と考える次第である。

3 センターの諸機能とこの1年の活動

センターの主たる役割は3つある。それについて、簡単に説明しよう。

（1）研究推進機能

本センターは、学術領域を横断する「プロジェクト研究ユニット」を複数組織し、学外の共同研究者を加えて、独自の視点から現代社会の構造を解明している。現時点で、多分野の研究者が12のプロジェクト研究ユニットを立ち上げ、地域や観光に関する諸研究のほか、コロナ後の世界を展望する文明論的な研究を行っている。各ユニットの詳細については、センターHPを参照していただきたい。本センターは、各研究ユニットを統括し、地域創造に寄与する知見を広く社会に発信す

る。またユニットの他、センターが主催する機関横断型研究プロジェクトを構想中である。その第一段階として、2021年度は「地域創造研究センター キックオフ連続シンポジウム」を4回開催した。これについては後述する。

（2）コンシェルジュ機能

本センターは、奈良県のシンクタンクとして、地域創造を担う諸団体の良き相談相手をめざしている。奈良県立大学に対する、地域からの相談・共同研究・受託事業等を受付ける窓口がセンターである。是非とも、気軽に問い合わせていただきたい。地域のニーズに応えるため、本学の研究や地域活動を広く発信し、さらには県内を中心に諸団体の地域活動情報を集約させ、さまざま関係者をつなぐ結節点の役割を果たしていきたい。

（3）コンシェルジュ機能

本センターは、URA（ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター）室を設置し、外部資金獲得のための戦略策定・情報収集、学外者との連携、研究成果の発信等、研究支援体制を整備している。

以上がセンターの役割についての概略である。次に、先に触れた「キックオフ連続シンポジウム」について報告する。私たちは、全体のテーマとして「力学の転換」を掲げた。その趣旨は、前章（2）「センター創設の理念」で論じた通りである。第1回は「文明史的転換」を正面から取り上げ、連続シンポジウム全体の総論とし、第2回はアフターコロナにおける「大学と地域創造のあり方」を、第3回は「観光のあり方」を、それぞれ主題とした。第4回は「中山間地域の20年後」をテーマに、地域創造の実践を探究した（以上、「次頁・表1」をご参照。各シンポジウムの動画は、第3回を除きセンターHPで配信中）。

表1：キックオフ連続シンポジウム概要

全体テーマ：力学の転換	
第1回シンポジウム：文明史的転換期における撤退的知性——成長神話を越えて	
登壇者	内田樹（思想家・武道家）、水野和夫（法政大学教授）、堀田新五郎
第2回シンポジウム：アフターコロナの大学と地域創造——地域創造からの知的創造	
登壇者	吉見俊哉（東京大学教授）、浅田尚紀（奈良県立大学学長）、早川公（大阪国際大学准教授）、西尾美也（奈良県立大学准教授）
第3回シンポジウム：コロナ禍のアジアにおける観光の現状とポストコロナの観光を考える	
登壇者	和泉宏明（国連世界観光機関）、ラナシンハ・ニルマラ（奈良県立大学准教授）、中谷哲弥（奈良県立大学教授）、亀山恵理子（奈良県立大学准教授）
第4回シンポジウム：中山間地域の20年後を考える	
登壇者	作野広和（島根大学教授）、坂本大祐（オフィスキャンプ代表）、堀田新五郎

私たちは、パンデミックのただなかでセンターを創設した。コロナ禍で人々はステイホームを余儀なくされ、観光業・飲食業などは大きな打撃を被ることとなった。しかし同時に、世界中が考え始めたのである。これまでの働き方、学校のあり方、コミュニケーションのあり方から、一時的な撤退が不可避となったとき、「働くとは何か」「学ぶとは何か」「伝え合うとは何か」、人々は、その本質を考える必要に直面する。これがパンデミックにおける唯一の積極的な側面かもしれない。撤退とは、既存の力学、その慣性から浮上する知的な契機である。これまでの当たり前をカッコに入れ、たとえば「満員電車で通勤・通学」とは別のあり方を模索すること、こうした「生のスタイルの転換」が、いま求められている実践ではなかろうか。現に多くの人々が、東京からの撤退可能性を描きつつある。この機会を活かし、センターは、中山間地域の将来ビジョンを構想する。

4

奈良県南部・東部振興にむけて ～奥大和学校プロジェクト～

奈良県南部・東部は、広大な中山間地域が広がり、そこでは人口減少と高齢化が進んでいる。2015年と2020年の国勢調査人口確報値を比較すると、県南部・東部12村のうち8村が、全国で人口減少率が高い村30位以内に入っている。これは、奈良県最大の課題ではなかろうか。こうした認識を皆が共有しつつも、しかし日々の仕事に追われ、また課題が大きすぎるため、住民も行政もなかなか長期的な将来ビジョンを描けなかったのではないか。「中山間地域の20年後を考える」——このテーマは、奈良だけの課題でもなく、中山間地域だけの責務でもない。日本全体の将来を、私たちはともに考えなければならない。

こうした問題意識のもと、センターは本年3月に第4回シンポジウムを開催した。そこで論じたことの一つとして、「奥大和学校プロジェクト」がある。近代は「学び」を二つに分割した。一方に、大学を頂点とする学校・アカデミズムがあり、

他方に、仏道・茶道・華道・武道等の「道」がある。前者は、それぞれの領域（政治・経済等）で現象の分析・解明を目的とする。対して後者は、領域内の現象を扱いつつも（茶をたてる・花を活ける）、その目的は現象の分析ではなく、世界と自己との関係性にある。関係性を整えること、これが、仏道から派生した「道」の目的ではなかろうか。ならばその知見、その学びの作法こそが、いま喫緊に必要とされてはいないか。

というのも、先に見たように、私たちが抱えている課題の本質は「巨大な生活習慣病」だからである。この20数年、だれもが東京一極集中の弊害を訴え、だが集中は止むことなく、地域の衰退もまた続いた。問題の核心は、止められない止まらない状況をつくる「慣性の力学」である。これにはまり続けるかぎり、日本の将来は暗い。ならば、こうした力学から「浮上=撤退」する知性とは、永年にわたり「道」がつむいできた「わざ」なのではないか。生活習慣病の根本治療とは、世界と自己との関係性を整え直すことだからである。よってセンターは、アカデミズムと「道」との再融合を試みる。大学はいま、近代以降「道」に託された課題解決の作法を、学び直さなければならない。修験道の聖地である奥大和は、こうした試みにふさわしい場所ではあるまい。

では、「奥大和学校プロジェクト」をどう構想するのか。これを、本稿冒頭の問い合わせたい。アリストテレスは、主著『形而上学』を次の文章から始めた。「人はだれでも、生まれながらに知ることを欲する」。知ることの喜び、学ぶことで世界が更新される驚きと楽しさ、「万学の祖」アリストテレスは、これが人間の自然本性であるという。そうかもしれない。近代日本では、「学びたい・学ばせたい」「学校に行きたい・行か

せたい」という思いがあふれている。ではなぜいま、学校嫌い・不登校があふれているのか？ 学校にあった吸引力は、いま、どこに消えていったか？

思うに、明治の学校建築の佳さが向学心の凝集にあるならば、当時の向学心とは「学ぶこと=可能性を広げること=自由」への aspiration ではなかったか。身分制のくびきから逃れ、だれもが学校に行って己の職業を選び、人生の“主人公”となること、これが明治の夢である。学問の核心には、つねに「人間を自由にする技法：リベラル・アーツ」が存在する。だが、「末は博士か大臣か」という素朴な夢は、漱石のいう「皮相上滑りの開化」^{注1)}のもと、エゴセントリックな立身出世主義と国家主義の結合に陥る。その結末が昭和の敗戦だとしたら、戦後改革もまた日本人に同じ夢をみさせたのではないか。平和と民主主義と経済成長のもと、高等教育により、己の人生の“主人公”となる——これが昭和後期の夢であろう。だが、それも成就したとはいがたい。多くの者にとって、勉強とは受験スキルの鍛磨となり、結果、自分で考えることが失われ、既存システムへと埋没する。卒業後の人生は、「満員電車のサラリーマン」へと一元化されていくのである。これを、人生の“主人公”といえるか？

紙幅の都合上、結論のみを書く。私たちは、奥大和に「“道”的学校」をつくり、そこに多くの人たちを、特に大都市圏から招き入れたい。この学校では、関係性を整え接続することを、学びの核心にすえていく。具体的には、デンマークのフォルケホイスコール^{注2)}を参考に「社会の内と外の往還」を図る「山學院」の試み、学びの共有空間を生み出すアートプロジェクト「グリーン・マウンテン・カレッジ」の試み、学と職との接続を図る「エコール・ベルーフ」の試みなどである（表

2)。いずれの「学校プロジェクト」においても、自然と身体、社会と自己、稽古と創造、さまざまな関係性を整え接続することが模索されよう。学ぶこと、創ること、生計を得ること、楽しむことの連続性が探究されるのである。自分を、人生の“主人公”とする道は、こうした試行錯誤と不可分ではなかろうか。「即今、^{そっこん}当処、^{とうしょ}自己」。「いま、ここで、私が主人公であること」、その必要性にはだれもが首肯し、しかしその実践にはだれもが挫折する。私たちは、この難題に楽しく取り組むつもりである。よろしければ、と一緒に。

昨今、東京一極集中からの撤退に魅力を感じる人たちが増えている。これは多くの調査で明らかであろう。精神的なインフラは、既に整備されつつあるのではないか。では、物理的インフラはどうか。私たちは大学のセミナーハウスを奥大和に設置し、「学ぶことを学ぶ」場を創りたい。

表2:「道」の学校の取組

プロジェクト名	具体的内容
山學院	東吉野村のシェアオフィス「オフィスキャンプ東吉野」に集う移住者たちを中心に、様々なテーマでの対話を行い、社会の内と外との往還を目指す。
グリーン・マウンテン・カレッジ	芸術家の養成ではなく一般教育を目的とし、人が何かと接触する際の思考を探究しつつ、すべての人を創造的にするワークショップの実践を目指す。
エコール・ベルーフ	社会生活で自分に与えられた地位や役割から離れ、「生業」をキーワードとして「学ぶ」「働く」「生活する」などが融合した生き方を探り、新たなコミュニティの創設を目指す。

【注釈】

本稿の記述は、「撤退学研究ユニット」の成果に負っている。ご興味のある方は、「撤退学宣言I（問題編）II（解決編）——ホモ・サピエンスよ、その名に値するまであと一步だ」（『地域創造学研究50、52』奈良県立大学研究季報第31巻第4号、第32巻第2号）を参照されたい。

注1) 夏目漱石の講演録にある言葉で、漱石は、江戸時代の鎖国のために日本の開化が西洋に比べて一気に進んだことで、「上皮を滑って行かなければならず、また滑るまいと思って頑張るために神経衰弱になる」と述べている。

注2) デンマークで生まれた全寮制の成人教育機関。国籍に関わらず政府の助成を受けることができる。試験や成績がなく、本人が何を学び何に生かせるのかという自己実現の心を養う。

【プロフィール】

奈良県立大学 理事・副学長
地域創造研究センター長
堀田 新五郎 氏



東京都出身。1994年神戸大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得後退学。1997年奈良県立商科大学商学部助教授。2017年奈良県立大学教授。2021年から現職。

専門は政治思想史。著書に『特別講義 政治思想と文学』（共編）など。